

特別優秀賞

僕の反抗期

福井県 福井大学教育学部附属義務教育学校 八年

高橋 夏月

母は保健師である。保健師はコロナになってからよく聞く職業だが、僕の母は、その仕事とは少し違う。健康診断を受けた人のところへ行き、健康相談をしている。家でも、僕にジュースばかり飲んじゃダメ、父にラーメンのスープ飲んじゃダメと言って、うるさい母である。いろんな人のところへ行って、こんなにうるさく、お節介ばかり言っている母は、きっと僕や父と同じように、うっとうしいと思われるんだろうなと思っていた。

ある日、電話をかけている母がいた。「暑い日が続いているけれど、体調は大丈夫ですか？」と聞き、話をうんうんと聞いて「おめでとうございます。」「すばらしいですね。」「失敗した人は原因がわかっているの、次は成功しますよ！」「忙しい中、がんばっていますね。」「関心持ってもらえて、嬉しいです。」と、前向きな言葉ばかり使って話していた。

僕は（えっ？）と不思議に思い、つい耳がダンボになっていた。健康診断で悪い結果が出ている人へ、怒るのが母の仕事じゃなかったっけ？ 怒っていないな、うるさくもないな、むしろほめているな、と。電話中の母の顔も笑っていた。機嫌のよさそうな母を見て、僕までほめられたような気分になって、調子に乗りそうになった。

電話を切った母は、いつもの母に戻っていた。「なんで怒らないの？」と聞いてみると、「怒って、夏月はやる気出る？」と聞かれた。いや、反抗期の僕は、怒られたら言い返すな、と心の中で思ったが、あえて何も答えなかった。そして、なるほど、と思った。怒られたらやる気は出ないが、ほめられたらいやな気持ちにはならないし、なんなら、さっきの僕も調子に乗りそうになっていたと思った。

同じことを伝えるのも、言葉一つで印象が変わる。相手がいい気持ちになれば、少しやってみようかなと思える。またこの人と話してもいいかな、と思ってもらえるのではないか。また、「健康は自分で守るもの」と思っている人が多いけれど、「健康は自分のことでもあるけれど、家族のため、会社のため、社会のためと、みんなつながっていくんだよ」とも教えてもらった。

小さな親切も同じだと思う。小さな親切をしてもらおうと嬉しい気持ちになり、自分もしてあげよう、今度お返ししようという気持ちが生まれる。実際に行動して「ありがとう」と言われれば、もっと嬉しくなる。そして、小さいことが学校全体の活動になったりと、つながっていくと思う。

でも、まずは言葉かけ。行動に移すことも大事だけれど、反抗期の僕にはこれが一番響いた。相手も聞いて嬉しい言葉、自分が言って笑顔になれる言葉が大切だ。温かくなる、いい気持ちになれる言葉かけをたくさんできる中学生になりたい。

そろそろ反抗期を卒業しようと思えた。